高崎市教育長賞

オリンピックを通して考えた人権

コロナ禍において開催の有無が議論される中、東京オリンピックは開催されました。連日、日本人のメダル獲得が報道される中で私の心に残ったニュースがあります。それは、陸上女子砲丸投げで銀メダルを獲得した、アメリカ代表のレーベン・ソーンダーズ選手が差別の抗議として、表彰台で両腕を交差し、「×」をつくったというニュースです。虐げられてきた全ての人は交差するという意味を込めて、両腕で「×」を示したそうです。彼女は、「ＬＧＢＴＱやアメリカ系米国人、世界の黒人社会…自分はたくさんのコミュニティーに関わっている」と思いを語りました。

また、サッカー女子日本代表選手がイギリス女子代表との試合開始直前、片膝をつくアクションを通して、人種差別に抗議したというニュースもありました。この片膝をつく行為は、アメリカのスポーツ界を中心に広がったもので、黒人への暴力や差別への抗議の意志が込められているそうです。

オリンピックでは、憲章第五十条により政治的・宗教的・人種的な宣伝活動が禁じられています。国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）は、オリンピック期間中に差別などを非難して拳を突き上げたり、膝をついたりする抗議行為については、表彰台に上では処分の対象としています。

オリンピックにおけるこうした抗議行為について調べてみると、一九六八年のメキシコシティー大会において、陸上競技男子二百メートルの表彰台で、世界新記録で優勝したトミー・スミスと三位に入ったジョン・カルロスが黒い手袋の拳を高々と空に突き上げた「ブラックパワーサリュート」（黒人の力を示威（じい）する敬礼）と呼ばれる事件があります。彼らはこうした行為をしたことで、ＩＯＣにより選手村から追放されました。その後、世界の批判の嵐にさらされ、非難の矛先は家族にも向けられ、カルロスの妻は自殺へと追い込まれてしまいました。こうした歴史から、オリンピックの舞台で差別に対する抗議をすることが、選手にとってどれだけリスキーなことか分かっているにも関わらず、彼らはどうして抗議の意志を体で表現したのでしょうか。それは、世界中で差別がまん延しており、人類の全てが保証されるべき「人権」が侵害されている現状に、声を上げずにはいられなかったのだと思います。残念ながら、日本では「人権」を主張する人々を目にする機会が少ないように感じます。そのため、サッカー女子日本代表選手達が日本の地で差別への抗議を表明した姿にとても驚いたと同時に、勇気

ある行動に感動しました。

また、東京オリンピックの最終聖火ランナーを務めた大坂なおみ選手も、全米オープンで、アメリカで警察の人種差別的な暴力の被害に遭った黒人犠牲者達の名前が書かれたマスクを着用し、ブラック・ライブス・マター運動を行っています。このことは、世界中のニュースで報道され、彼女の行為を同じ日本人としてとても誇りに思いましたし、「人権」について主張する行為をより身近に感じることができた出来事でした。

以前母から、中学時代に英語のスピーチコンテストの予選において、教科書に載っていたキング牧師のスピーチを暗唱した時の話を聞いたことがあります。母のスピーチを聞いたＡＬＴが、「審査員の中に白人がいると、そのスピーチの評価が下がる可能性があるから、別のスピーチを暗唱した方が良い。」とアドバイスされたそうです。当時中学三年生だった母は、アメリカは人種のるつぼであり、人種差別は過去のものと思っていたため、ＡＬＴのアドバイスに衝撃を受けたそうです。

それから三十年近く月日がたっているにも関わらず、今だにオリンピックで抗議の声を選手が上げているなんて、人種差別は本当に根強いものなのだと実感しました。三十年前に比べ、ＩＣＴ化は日々進んでおり、目まぐるしい変化が起きているにも関わらず、人間の本質はほとんど変わっていないことは残念でなりません。人間に優劣などあるはずがないのに、どうして人間は自分と違うコミュニティーを攻撃してしまうのでしょうか。それは、他のコミュニティーの人達を理解しようとしないからだと思います。世界には色々な人種があり、さまざまな思想を待つ人がいてその人達全員が同じ人間で、「人権」を持っていることを再確認すべきです。

私はまず、家族やクラスの友達から、自分と違う考えの人がいれば、その人の意見を真剣に聞くことから始めたいと思います。そうすれば、自分の意見がいつも正しい訳でなく、色々な意見があって、色々なコミュニティーが世の中にあることが理解でき、自分の身近な人の「人権」を守ることができると思うからです。